

くまがさ

「母校の敷地オリエントへ」

「新天地緑ヶ岡のゴルフ場に決定」

母校の移転用地が、緑ヶ岡のゴルフ場に決まった。六月八日の新聞報道によって、このすばらしい決定が世人の知るところとなったが、予期できなかったことだけにその反響は、非常に大きかった。

すばらしい環境の地に、母校はやがて新築されることになる。七十年の歴史をもつ現在地を離れることで、一沫のさびしさを禁じ得ないが、この決定は同窓生にとって、移転を許容するだけの見事な出来事であったと言えよう。

ゴルフ場は、釧路段丘の一角に位置しており、湖陵ヶ丘の東方へつらなっていることから言えば、場所的に違和感はそれほどなからう。この決定までに努力された関係機関の方々に、ただく感謝あるのみである。

湖陵ヶ丘に風ありて……その丘が校地としての基準面積に比較して、約一万六千平方メートルも下まわっているというのである。旧校舎時代には、校舎手前北側にグラウンドが広々としており、結

構な校地だったと記憶している同窓生も多かろう。しかし、現在の学級規模では、生徒総数が千三百名もいて、校舎の総面積に対して約五万五千平方メートルの校地が必要なのだそうである。

従って、校舎改築の場合には、どうしても、現在地に建てるわけにいかないのである。新天地は、面積が約十

四万平方メートルの広大な丘陵地。ここに新校舎が建設された暁には、これまでに見えない学園が現出することになるであらう。

新たな歴史の幕あけとして、一日も早く、校舎の改築が実現することを望みたい。校舎改築促進期成会では、本年度、構成メンバーを整えて、鰐淵俊之会長以下、新校舎建設が早期に実現するよう、陳情書

を作成し関係機関に強力に働きかけているところでもあり、今回の校地取得によって、一気に実現化をめざしている。

同窓会館の問題は、母校改築と

深くかわわっていることから、今回の母校移転の新展開にあわせて一層強力な取り組みが期待される

ところである。母校の歴史七十年代において、校地移転を期に、伝統の重みをかみしめ、二十一世紀を展望した新学園の実現を望んで止まない。



ゴルフ場の左下14万平方メートルが母校の校地に!!

第10号発行を祝す



編集委員に脱帽

会長 長 組村 真平

私達が執行部を担当して五年経った。そして、会報「くまざき」も第十号をえた。当初、執行部内部で業務分担を決めた際、編集責任者に教職員湖陵会選出の副会長をお願いした結果、爾来、田村

佳男氏、名倉滉氏が各二年、豊島弘道氏が一年、それぞれ有能なスタッフを動員されて、「前号より更に良いものを」を合言葉に努力を積み重ねて今日に至ったものである。スタッフ一同の、その努力



私の回顧録

創中十三期生 古谷 武一

くまざき第十号の発刊心からお祝いいいたします。私の拙文をとお話し、紙面を汚すことと恐縮しております。せっかくのことでもあり場ちがいですが年令七十二才になって未だ青春時代と心持は少

しも変っていないものですから昔を回顧して意気盛んであったところをメモしてみることになります。創中時代と云へば大正十五年から昭和五年まで五年間私の人生に大きく影響を与へた人は中川久平



「くまざき」第十号発行を祝す

釧路市立武佐小学校 校長 田村 佳男

「機関誌を発行したい。」組村会長さんの願いは、同窓生みんなの願いでもあった。かつて幻の第一号があったそうだが、継続が問題である。

「同窓生の多い職場が、持ち回

わりで責任発行していけば、かなりの回数が可能であろう。」こんなことを考え、教職員湖陵同窓会が初回の責任を負うこととなった。「三号まで継続出来たらしめたもの。」こんな考えが、当初誰の頭の

に満腔の謝意を表したい。

時折、編集会議を覗くと「どうも記名の入った寄稿文が多い。も

っと編集委員が足で書くべきだ」とか「文集スタイルではなく、新

聞調に改めるべし」とか「印刷費

を広告で賄うのを止めて、同窓会

の一般会計から支出するのが筋で

ある」とか「折角、印刷しても、

行き互っていないという声もある。

配布方法を再検討すべきだ」など、

先輩と伊藤郷一先輩でした。中川

先生は私を満州に誘い出した人で

あり伊藤先生は政治の道に押し出

してくれた人です恩師では菅原寛

也先生で卒業後の職業を決めて社

会の一歩を踏ませた方です私は創

中を卒業するとき操行甲であった

ことと五ヶ年間無休と同時に寒

稽古も五ヶ年無休で置時計を二個

貰ったこれは私の心からうれしく

思ったことの一つでした。満州の

ハルビンの繁華街キタアスカイを

中にもあったようだ。

上岡信明氏(現校長)をキャップ

に数人の編集者で出発した。

さすが、原稿執筆者に事欠くこ

とはないし、金に心配する必要も

なく、作業そのものも慣れた人達

ばかり、原稿の集りがおくれる手

間どつた位で、予定日より若干お

くれ、会長さんの願い通り、五十

四年度湖陵卒業式に間に合うかた

いろいろな議論が熱心に行われて

居り、正に「脱帽」である。

創刊の辞で、かつて私は書いた。

「同窓会が會員のより身近な存在

になる。そういう役割を果す会

報であることを念じたい」と。そ

の理想に少しづつ、着実に近付い

ていると考えるのは、我田引水であ

ろうか。

兎に角、十号になった。更に内

容の充実を期したいと思う。

創中の手拭で作った浴衣で飲み歩

きお巡りさんに注意された、国際都

市で寝巻で歩いたと満人巡査に交

番に連行されて日本の着物だと辯

解した一幕もありましたシベリヤ

に四年抑留されたが身体が丈夫で

元気で帰還して父母の喜びようは

今でも昨日のように思い出されま

すシベリヤの捕虜生活四年はつま

かった筈だが今は遠い夢のような

気がしております。そして湖陵同

窓会の益々の発展を願います。

きた。

経費は総て同窓の方々の広告で、

この面は遠藤幹事長さんがやって

くれたのだが、私自身も先輩社長

さんのところへ頼みに行ったら関

連会社の分までとりまとめてくだ

さったりして、さすが、湖陵の底

力を見せられた思いだった。

29.8.12

同窓会館建設

募金活動いよいよ始動

母校の敷地、緑ヶ岡ゴルフ場

移転でははずみつく 募金帳記入六十年実際募金六十二年までに

第一面に記載されたとおり、母

校湖陵の移転先が、この程漸やく内定した。「現地改築は敷地面積が狭小に過ぎ、将来に禍根を残す。移転改築が望ましい」という道教委の意見もあり、格好な移転候補地のないま、早期改築が危ぶまれていた母校校舎改築問題は、釧路市が緑ヶ岡ゴルフ場を買収しその南側草原約二万坪を湖陵校舎敷地に提供すると道教委に申し入れたことから、急速に動き始めた。記念講堂の性格を兼ねることや校舎と暖房を連結させるという技術的なことから、この校舎改築にどうしても運動せざるをえないため敷地問題で宙に浮いた形になっていた湖陵同窓会館問題も、この程漸やく具体性を帯びて目の目を見ることがになった。

会館建設実行委員会が行っていた建設資金の募集は、建設位置が定まらず、従って道教委の建設認可も不明、国税局の免税許可も判断としないという状態では熱の入りにようもなく一頓座を来たしていたが、どうやら、この夏以後、再

び活発化しそうな模様である。

校舎改築は昭和六十三年ごろと推定されるので、会館建設も、それに合せて、その頃と予想されるが、募金は建設着工時までに集められていなければならぬため、現在の予定では、昭和六十年十二月までに募金帳記入、昭和六十一年、六十二年実際の集金となるものようである。

最近建設実行委員会が開催されていなかったの各期の募金帳記入の動向は詳かではないが、事務局によると、湖陵一期が八〇〇万円、湖陵二期が五〇〇万円、湖陵三期が四〇〇万円をそれぞれ超えたとの報告が寄せられている由である。

尚、事務局からの要望を列挙すると

- 一期四〇〇万円という噂が流れているが、四〇〇万円以上を目標という趣旨だから、四〇〇万円にこだわらず、たくさん記帳して戴きたい。
- 実際の集金は六十一年、六十二年の二年間に互るため、

二・三回の分割払でも結構なので卒業仕立の若者は兎も角なるべく一口一万円と云はず何口か募金をお願いしたい。

○ 期が中心になって募金を行うのが原則だが、既に職場で募金帳に記帳した人は、それも結構である。但し、例えば職場の方に二万円と記帳し、同期の割当が五万円の場合は同期の募金帳に三万円(残二万円は職場の募金帳に記載済み)と記帳して戴きたい。

○ 息子や娘の分を父が自分の期の募金帳と一緒に記帳するのは一向に差支えない。例えば、

- 山田太郎 金壹拾万円
 - 山田花子(35期) 金壹万円
- という風に。

この秋、いよいよ募金で騒がしくなりそうな雲行である。諸兄弟の深い理解と温い御協力、御支援をお願いしたい。

校舎改築内定同慶の至りです併せて土地を寄附して下さった先輩道新上関元社長の好意を生かすためにも、同窓会館の早期完成も熱願します。

前道議会議員

滝 沢

勉

(釧中19期)

学園だより

同窓生のみなさま、いかがお過ごしですか。

まず最初に報告しなければならぬのは、七〇年の伝統を導いてきた校舎が、いよいよ湖陵ヶ丘を去らねばならない時が到来したということとす。

現校舎は、昭和二十八年二月二十二日未明に発生した火災によって旧校舎の大部分を失ない、当時の同窓生や在校生も含めた多くの関係者の盡力によって再建されたもので、(この災禍を記念して毎年二月二十二日には防火避難訓練を実施している)以来三〇年を経過した当時の新校舎も、今では雨もり、窓枠、床板張り替えなどの修理に追われるほど老朽化がはげしく、また学級増に伴って、(現在は三〇学級)狭隘になったため、近年改築が取り沙汰されてきました。そのような空気の中で、一昨

年校舎改築促進期成会が結成され、関係者への陳情活動が続けられてきたところ、このたび釧路市によって移転改築用地として釧路ゴルフ場を買取取得していただき、改築の気運が急速に高まってきました。早ければ六四年完成との声も

きかれますが、いづれにしても遅かれ早かれ多くの思い出を残してこの湖陵ヶ丘に別れを告げねばなりません。

焼失を免がれ、七〇年の歴史を刻む体育館や剣道場、同窓生の苦勞によって建てられた五〇周年記念図書館や記念体育館、汚れてうす暗くとも青春を謳歌できた現校舎等々が、おそらく二万名に及ぶであろう卒業生を輩出してその任務を終り、新たに三代目として初々しい姿を緑ヶ丘にあらわすこととしよう。

高体連も一段落しましたので、運動系クラブの活躍状況を紹介いたします。全道大会

には羽根球、ハンドボール、体操、硬式テニス柔道、陸上に加え、久し振りに卓球が出場、このうち陸上の菊地章泰(三年・ヤリ投)が二年連続代表権を獲得して上村英樹(二年・百MH)と共に炎天下の秋田で行われる全国高校総体に出場します。



恒例の湖陵祭「行燈」づくりたけなわ

《59年3月卒業生》 合格実数

	現	役	浪	人	計
国公立大	55	(82)	68	(50)	123 (132)
私立大	80	(77)	77	(75)	157 (152)
短大	42	(30)	3	(8)	45 (38)
各種・専修	36	(41)	2	(0)	38 (41)
計	213	(230)	150	(133)	363 (363)

※ () 内の数字は昨年度

春の大会で地区優勝を果し、夏の甲子園への出場が期待された野球部は今度も無念の涙をのみ、全道大会連続三〇回出場をめざした剣道部の地区予選敗退も惜しまれます。

次に、この三月の卒業生の進路状況を別表にして掲載します。紙面の都合で詳細は略しますが、道東では数少ない進学校の一つとして定着した湖陵の門を、地域の選

良としての自負を抱きながら、遙かエルムの森を望見する位置を高校生としての出発点とする者も少なくない中で、些細な気の緩みから目標を縮小さざるを得な

い諸君が多数いるという冷厳な事実を指摘するに止めておきます。今夏休みの最中にも拘らず、今日も大勢の三年生が受験準備のための夏期講座や校内補習に続々とつめかけ、一、二年生はクラブ活動や補習授業に汗をながしながらその合間をぬうようにして学校祭行事の行燈や劇づくりにクラスを上げて取り組んでいます。

湖陵高校同窓会 総会に寄せて

社会により多くの有能な人材を輩出して伝統を誇る学舎湖陵高等学校が関係者御一同の御協力によって緑ヶ岡に移転新築が本決りとなり誠に御同慶に堪えません。更に此の機をとらえ多年の懸案であり念願といたして居ります同窓会館の建設につきましても、同窓生一同の結束と熱意で今後とも推進され成就されますことを心からご期待申し上げ、私も出来る限りの努力をして参りたいと存じます。

前衆議院議員
北村義和
(釧中二六期)

当番期紹介

遙かなり

釧中33期・湖陵2期
花井 哲雄

今年、二月十日、朝。釧路空港に勢揃いした十五名の修学旅行生。年令は五十二・三才。それが我々三十三期の面々でありました。男女共学も、修学旅行も、一期下からという、何ともめぐり合わせが、すれすれの所で不仕合わせな学年でありました。その反面、大東亜戦争には、予科練も含めて一期上までということ、直接参加はしておりません。言うなれば三十三期生は、軍国時代と戦後社会のはざまで少年時代を経験した時代の落とし児のような存在なのかもしれません。

釧中物語に、花の三十三期生と書かれたゆえんも、そのような、近代日本史の激動の谷間に、ひっそりと咲いた、カレンな野の花の意味と理解致しております。入学は昭和十九年。明けて二十年の四月には、晴れて釧中の二年生とあり、飛行場建設、援農、暗

渠排水堀り、針葉樹伐採と、それが学校をあとにしたのが、丁度十四・五才のころでございました。やがて八月十五日。天皇の終戦宣言のラジオが津々浦々に流れ、時代は一挙に、戦後の混乱期に入

ってゆきました。釧中から釧高、そして、湖陵高校へと変遷するに伴い、マントとゲートル、イラ草の服を経て、黒の詰襟となる頃には、女学生が気になり出す年令になっておりました。

やどばち会登場

湖陵12期
中谷 藤和

昭和35年の春卒業したことから、三五会(さんごう会)と称して同期会を結成して、早や八年目を向かえた我々仲間。会の発足當時を振り返ると、結成の準備のためと云っては、結論を出さないまま、随分ネオン街をはしごしたこともありました。現在では、種市幹事長を中心に、亀島・杉山・菅野・西田・藤田・菊地・栗山・石川・榎本・桑原・山本・片山・中谷幹事等の努力と熱意で同期会の協

と運営は最高ではないかと思う。高校時代、大変個性豊かな仲間も実社会で中堅として、又家庭の主婦として余裕を見せるトシとなり、母校を語るのも熱っぽいものが時にはあり、先般、母校移転の話題があつた際にも、一度解体前の教室に入つてみたいと云うものもこの現れかと思ふものである。二十年余前の入学式を思い出すと、寒い屋外での式であり、雨漏りする体育館を思うと、早く新校舎の完成を待たれる卒業生の一人である。

さて、毎年二クラス毎に幹事が輪番による当番を決め、同期会を開催している。時には卒業して以

来の顔々、恩師かなと思われる様なオツムの彼もいれば、この仲間

当番期に当りて

湖陵22期
日野 正樹

今年、湖陵同窓会総会の当番幹事を仰せつかることになり、三五会幹事一同は、中間幹事としての自覚と湖陵の良き伝統を続けるためにも、頑張る仲間です。

は全道高校野球春季大会への出場やら湖陵高校々舎移転用地が決まる中で、何故か母校への思いが高ぶる年であります。六月に、同窓会の当番幹事であることを知らされ、さてどのような事をさせられるかと考えながら、幹事会に参加した所、二期・十二期の大先輩に混じつて、なつかしい我が二十二期の仲間を見つけれしく思った次第であります。何回かの幹事会の中で、大先輩の方々の武勇伝やら、戦時中の学生々活の話や聞かせてもらい、楽しく仕事をさせて頂きました。二十二期には、まだ同期会もない状態でしたが、先輩諸氏の足を引っ張る幹事ではございませんが、十年後に巡ってくる

当番期には、その中心となり活躍できる同期会を結成致したいと考えている次第であります。この幹事会を通じて、小松鍊平先輩の来

心となつて準備を進めて下さった十二期の皆様に感謝をこめて御礼を申し上げます。同窓会まで後十日、たった今当日の受付のため、人員確保の電話依頼が二十二期のK君よりありました。さて、仲間に電話をかけようかと思ひながらこの原稿を書いている次第であります。

同窓会館の建設について
同窓生一同の結束と熱意で
早期建設を祈る

張 江 悌 治

(湖陵5期)

釧路市鶴ヶ岱3-4-2 TEL41-5871



「流汗悟道」の精神で

釧中二十五期 日向正雄

編集氏より突然寄稿を依頼され内心驚きもし、心の余裕も無い儘に原稿用紙を渡されたので引き受けざるを得ず、一応、その責を果たすべく、思いつく儘に書き記す事にする。

内容は、我が青春は、と云うタイトルなので、昔を思い出して乍ら書き記したいと思う。

思い出と云うものは総じて懐かしく感じられ、苦しかった事も過ぎ去ってしまったれば皆良き楽しかった時代に変えられるもののようにある。私の青春も戦時体制下であり非常なる規制を受けていたが、その時代に於いての起居動作に陰気な事が無かったような気がするし団体生活にも張りがあり、毎日毎日が気合いの連続であり、明日に向っての努力でもあった。

幸い私は剣道部に籍を置き、授業終了後部活動に随分と力を入れたものだ。体力的にも向上し、技術も磨かれ、次第に剣道と云うものの虜になり熱中したものである。

また、道大会に出場し、優勝を夢見る一員ともなり合宿訓練に参加し精魂を傾け猛稽古に励んだ日

々もあったが、運命の徒らか大会が中止になった時は、全身の力が抜け数日間問も身につかなかったのを覚えております。此の事は今でも忘れられない悔しかった過去の思い出となっております。

七月二十八日は、全道教職員剣道大会が厚生年金体育館で行なわれたが、十数年振り以来釧された畑中先生御夫妻を囲み、数人の同意で会合の場を設けたが、先生も我々も昔に戻り、青春時代の思い出を語り合ひ、時間の経つのも忘れ、或る時は涙を流し、或る時は笑に打ち興じたが、青春時代の良き思い出話許りが表面に出、悪い話題は忘却の彼方にあつた事を付加したい。

幸い私はよい師、よい友人に恵まれ六十の坂を越えたが、俗に五十、六十鼻たれ小僧、七十の青年と云われる如く、残り少ない人生を充実すべく今後此の青春時代の気持ち忘れず、なほ一層の努力を続ける積りである。



「思い出」もいとおしく

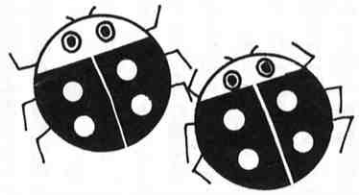
湖陵四期 橋本和世

女学校へ入学し、釧中の校舎で卒業（共学も二年経験）と云う、戦後の教育改革の先端を歩んだ私達、今又、六三三制見直しなどと云う言葉を紙面に見い出すと、

我が青春は、如何にありしやと云う想いと、二年しか過ぎさなかつた湖陵での生活が、すごくいとおしいものとして迫って来るのは、母校を離れて三十有余年、齢五十を過ぎた感傷でありましょうか。

今ほど位位の蔵書があるのかわかりませんが、共学の年に焼けた古い校舎の西側に図書館が建てられ、本の分類を放課後、日の暮れる迄、何日も何日も根気よくやつたものでした。その書架に応援歌の練習をさぼりたくてよく隠れ、探しに来る上級生の足音が聞えるとうずくまってじっと息を殺したものでした。後に、道内の大きな図書館（札幌・函館）の見学に行かせてもらい、その頃、上野に一つしかなかった司書養成所に行くことを進められましたのに、いろいろな事情で断念しなければならなかつ

わが青春は...



母校湖陵高校の改築と
同窓会館建設に向け
校友一丸となって頑張っ
てまいりましょう。

北海道議会議員
綿貫健輔
(湖陵17期)



釧中32期 奥田達也

鬼を投げる

釧中生に長く愛された先の四代目幣舞橋が、永久橋としてかけかえられるために、仮橋であった大正十三年のことである。

当時の学校生徒監は、おっかないものであった。映画の観覧が、生徒禁止の頃など、特に厳しい時代で、校則違反の摘発役であり、アラ探し専門の風紀取締の先生は「鬼」にも見られた。

まして昭和九年に朝鮮の鎮南甫から転任してきた榊原直先生など最も嫌われる生徒監であった。マントをかぶって映画見物中の軟派組が時折、幾人とみつきかり、油をしたま絞られる。

私生活にもとかくの噂がある先生で、そのねちっこさが、純粹、淡白を好む生徒達には気に入らなかつた。九回生横山巖が和服の着流しで定められた袴もつけず、測候所から曲がって坂を下りかけたとき、出世坂を上がつてくる背は低い

濃い髭面の榊原先生が目映った。(イヤな奴。別の坂を下りるんだつた)と横山四年生は、挨拶しながらのろろと坂をおりた。一目にらまれば、震えあがる。その恐い目がギョロッと上を見た。

勘忍袋の緒きれて
放校されるも母校愛燃ゆ

うつ向き加減、意識しまいと努めていた横山は、その鋭い視線を感じ、思わず足を止める。身の縮む思いで、ようやく右手をあげて、敬礼をした。緊張のためにギクシヤクとなった。

「何だ、その敬礼は?」

一喝されれば泣く子も黙る、と大いに恐れられた一声が、横山の体一杯に浴びせかけられた。平謝りに、横山は謝罪し、弁解する。だが、ねちっこい榊原のこ

と、ちよつとやそつとでは許さな

い。解放されないまま、坂の上を下、立ったままで、にらみあう。(今や、これまで)

勘忍袋の緒が切れた! 横山の手が伸び、榊原の体にか

かった瞬間、足が大きく飛んだ。のちに東京都学生剣道連盟の副会長。五段で教士となる猛者だ。

さあ、大変。投げとばされて転んだのが、よりよつて、釧路市でも異色の人物、恐いことでは天下第一品の榊原風紀係先生。投げ飛ばしたのが釧中の四年生。「即刻、退学だ!」と強硬に榊原

は職員会議で頑張る。「先生を投げた生徒は確かに悪い。しかしなんとか穏便に」と、日頃から榊原直先生の品性、行動をニガニガしく思っている阿部と作校長をはじめ先生達は弁護する。日進小学校長横山長蔵の息子であり、前年卒業の兄、桂も同校教師をしたことなどを考慮されて、ようやく退学の罰は許されたが、北海中学へ転校となるのだった。その後、卒業の年に父を亡くし、苦学して大学へ。一流企業の特

製鋼に入社し、三十歳で「特殊鋼材」を設立。戦後、東京銀座風月堂や中央航空の社長となり、釧中の先生や卒業生の面倒を誠心誠意よくみた。

在京釧路会をつくり十八年間も会長をつとめ五十六年十二月一日七十四歳で亡くなるまで同窓会はもとより、釧路市の人々に尽くすこと何人にもおとらない。母校愛は卒業した者よりも、中途で、愛着をもちつつも退めた人達により多く、より大きいようだ。

「講義の内容は誠にくだなくて、人情の機微を語り、裏道のな忠実も交えて、面白い名講義でした。」

と同九回生トップの今井春蔵が地歴の榊原先生のことをいう。「鉄道も二位、湖陵も二位!」

と市民運動会での憤満やるかたない榊原チンナンボ先生の名演説に、夕闇迫るなか焚火を囲み、「湖陵に長き十年の!」と踊りまくった情景が、今でも一番先に臉に浮かぶ、と語るブラジル移住の遠藤忠雄は更にいう。「卒業十何年か経って、同期会の席上、横山(巖)デンペー君の消息を聞き、今のところ出世頭か」と私が言ったことを覚えて「います」と。

「毀誉褒貶」または「塞翁が馬」か。

常に業界をリードする

ポスター・パンフレット・ダイレクトメール・カタログ・カレンダー・事務用伝票・印刷のことなら何でもお気軽にご相談下さい。



米内印刷株式会社

本社工場 / 釧路市堀川町5 ☎(代)23-0471

社会人一年生

「初心を忘れずに」



川路市役所
張江美 予(湖34期)

「社会人として」



日本生命保険川路支社
山口昌世(湖36期)

あとがき

▼今夏は、濃霧日数の多いことでは、気象台開設以来の記録を更新したとか。湖陵ヶ丘も、高台のせいで、濃い霧の流れが校地を横切ることが多く、野球の練習などにも支障があったであろう。とにかく詩情をこえたきびしい自然がそこにあるように思う。

▼緑ヶ岡のゴルフ場を所有しておられた佐々木さんが亡くなられた。川路卒の大先輩のご冥福を心からお祈りしたい。今回の校地決定からの一連の出来ごとが、正にドラマとしか云いようがない感が強く、名状しがたい感慨がある。

▼会報「くまざさ」も、年2回の発行を守り、今回第十号をまとめることができた。会報には、それぞれの期の方々から寄稿をしていただき、より内容の充実したものにしたいと考えている。事務局の方に原稿をお寄せいただき、もつと、オリジナリティを發揮したものである。

投稿先 富士見一六六一
労働事務センター内

同窓会事務局

編集にたずさわった人

中川 邦雄 徳田 広

遠藤 隆吉 豊島 弘享

佐々木 孝

長いようで短かった学生生活もついに終止符を打ち、第二の人生の幕が開いた。銀座・丸の内を舞台に練り広げられる。多くのOLライフ小説を頭に描きながら、期待と夢を大きくふくらませ、市の職員として働くようになって四カ月、現実はとて厳しくて、且つ人生はそんなに甘くないものだということを知りました。

「市役所の何課にいるの?」と聞かれ「市民生活課の交通安全係」と答える私に「そこで何をしているの?」と不思議そうな友人の顔。「あのね」と説明している私の四カ月前を思い出す。念願かなって市の職員としての採用が決まり、これからは社会人として頑張るぞ!と辞令を手にした四月三日。配属されたのは「市民生活課の交通安全係」という所。私が一瞬、当惑したのも無理はないと思う。「交通安全」というからには、制服を

着て外に立ち、ビッピと笛を鳴らして交通整理をするのが毎日の仕事だと思っただからだ。

翌日から職場にはいり、仕事の内容を説明され、実際に仕事をしてみ、改めて自分の愚かさを知った。一瞬にして尊い生命を奪ってしまう交通事故から市民を守ろうと、必死の努力を続けているのが「交通安全係」なのである、といったら少しオーバーかもしれないが、市民にとつて有難い所なのは確かである。

さて、職場の中での私の仕事ぶりだが……あせりと緊張の中で、ただひたすらに仕事を覚えようとしていた最初の頃に比べると、仕事の要領もだいたい掴むことができたらしく、笑ってごまかす余裕もでてきたようだ。しかし、マイペースながらも、初心忘るべからずの精神は、シートベルトと共に常に頭の中に入れておこうと思う。

湖陵高校の一生徒であった私が、この春卒業し、社会人となって早くも四カ月目になります。

この四カ月間に、社会人としての自覚、責任というものを、多少ながらも持てた気がします。学生とは違う社会の重みのある意味を感じています。責任という意味で、学生とは全く異なる世界である、会社で、私は最初、緊張しているあまりか、動作が固くなり、失敗にも連続でした。しかし、失敗にもいろいろあり、ひとりよがりです。

つてしまうものと、うっかりミスがあります。前者は、絶対だと思いいい程、会社では通用しないと思います。コミュニケーションを大切に、理解できなければ、素直に聞き、正しいと確かめてから、行動をおこすことが必要になると思います。今までに、私も、曖昧に考えていた事が、ミスへとつな

がったことがあります。今、これからは、絶対に、失敗しないとは言いつてもいいですね。わからない事もどんどんでてくると思っています。

もし失敗してしまつたら、その時は何より先に謝ること、弁解したりするのは、もつての他だと思えます。この様なことは、先輩の皆さんや、知り合いの方にいろいろと教えていただき、そのおかげで、現在の私がいるものと思えます。全く失敗をしない人間などありえないと思うのです。その失敗をどう生かすかにより、成長するのだと思います。私は、まだまだ成長の、最初の段階です。

これからも、素直な気持ちで忘れずに、社会人として、頑張りたいと思います。

今まで、私に、いろいろな事を教えて下さった先生方にも、とても感謝しています。